

# 社会的養護における集団性と個別性

——児童自立支援施設での調査を通じて——

慶應義塾大学大学院・日本学術振興会  
藤間 公太

## 1 問題の所在

本報告の目的は、社会的養護における集団性と個別性について議論することにある。近年、社会的養護の小規模化や家庭化が主張されている。その背景には、これまで主流であった施設における集団型の処遇では、子どもそれぞれの個別ニーズが掬いとれないとの問題意識があった。こうした視点に立脚し、里親をはじめとする家庭的養護や、グループホームなどの社会的養護施設の小規模家庭的施設を推進すべきとの機運が高まってきている（たとえば、厚生労働省 2011）。

たしかに、自立支援のためにケアの個別性が確保は重要であろう。しかしながら、それはただちに集団性を否定し、社会的養護の小規模化につながりうるものなのだろうか。また、集団生活での養護に限界があるとしても、それはケア単位を小規模化することで解決されうるものなのだろうか。

## 2 方法

以上の問いの答えるため、報告者は、平成 24 年 5 月から平成 25 年 6 月にかけて、都市近郊に位置する児童自立支援施設 Z でフィールドワークを行った。様々な施設のなかで児童自立支援施設を対象としたのは、非行性の高い児童を処遇するという性質上、個別性の問題は特に重要な論点となると考えたためである。児童が非行に至った背景は様々であり、彼らが自立して社会生活に復帰するためには、その個別の問題それぞれに応じた対応が求められると考えられる。

調査は、月に 1 回から 2 回、日帰りか 1 泊 2 日で訪問し、子どもや職員とともに日課を過ごすという形で行った。平成 24 年 9 月より職員 12 人を対象に、半構造化されたフォーマル・インタビューを実施した（1 人当たり 1 回から 2 回 1 回につき 45 分から 1 時間 30 分）。11 名については許可を得て録音し、報告者自身の手で逐語録を作成した。残る 1 名に関しては、本人の同意の下で詳細なメモを作成した。

## 3 結果

調査からは、集団性と個別性は必ずしも対立するものではなく、むしろ入所児童個々の処遇目標のために集団性が活用されていることが明らかになった。たとえば、日々の日課が「振り返り」によって個別の経験に落とし込まれること、新規児童の入所や「先輩」児童の退所に伴う集団内の役割の変化が個々の処遇目標に応じて立ち現れること、複数職員と複数の子どもの住まうことでより児童の個別ニーズに対して重層的な対応がなされていること、などが示唆された。

## 4 おわりに

以上の結果を踏まえ、当日はケアの個別性を必要とすることが集団性の否定に直結する背景について考察する予定である。

## 文献

厚生労働省、2011、「社会的養護の課題と将来像」

<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000001j8zz-att/2r9852000001j91g.pdf>